

水と文明

Water and civilization

ネットワーク情報学部 佐竹弘靖

School of Network and Information Hiroyasu SATAKE

Keywords: water, civilization, culture, swimming,

はじめに

人類は水が無ければ生きていけない。いや、地球上に水が存在したからこそ人類が誕生したといっても過言ではない。しかし、世界を歩いてみると、その水が決して手に入りそうにない場所でも生活している人々を目にすることが出来る。この気づきこそが、私が水と人類のかかわりを求めてフィールドワークをする原点である。その第一歩は、パキスタンのモヘンジョダロへの訪問から始まる。30年ほど前のことである。

シルクロードを中心として今日までフィールドワークをするなか、水はもう一つの顔を見せつけてきた。我が国で次々と起こる大震災である。街に襲い掛かる大洪水は多くの尊い命を奪っていった。水の恐ろしさを痛感した瞬間である。

これまで人類は水とどのように関わってきたのか。フィールドワークで訪れた国々で見聞したものを取り上げてみた。どこから読んでいただいてもかまわない。

1 【サハラ砂漠で「泳ぐ人」】(アルジェリア)

年間総雨量 100 ミリ以下のサハラ砂漠。アフリカ大陸の約5分の1を占める大砂漠である。一木一草も生えず、命あるものをあたかも拒絶するかのような灼熱の大地。

しかし、約1万年前、この地域は最大で約400ミリの雨量を持っていたという。これは、現在のイタリア半島の雨量に匹敵する。

当然、川や沼さらには湖が存在し、そこには魚はもちろん水生動物なども多数生息していた。その証拠に、当時の壁画にはワニやカバなどが描かれている。なかでも現在のアルジェリアにあるタッシリナジェールの洞窟壁画は特筆に価する。

この壁画は、紀元前4000年頃～紀元前2000年頃に描かれたものとされており、この地域が乾燥化し砂漠化する以前の緑豊かで潤いに溢れた様子が数多く残されていることで有名だ。その中で目を釘付けにするのが

「泳ぐ人」と呼ばれている一人の人物画である。

頭と腕には当時の習慣なのであろうか鳥の羽のようなものをつけた人物が、口を大きく開け水に顔をつけた状態で描かれている。両足は、軽くバタ足をしているかのように上下している。きっと、魚を追いかけているとくっきりと水面を移動しているところなのだろう。泳ぐことができればごく当たり前の行動である。

しかし、これがサハラ砂漠のど真ん中に残されているのだ。

この洞窟壁画は、泳ぎの起源もさることながら、我々が直面している「地球環境」の危機を問いかけているのではなかろうか。「昔はここも住みやすかった……」と。

2 【遠泳の記録】(イギリス)

水泳にはいろいろな種目がある。

「遠泳」もそのひとつ。

「エンヤコーラ・ヨーイコーラ」の掛け声に合わせて、あたかも枯葉が漂うようにゆっくり泳ぐグループ遠泳がわが国では主流。

経験したことのある読者も少なくないだろう。

ところで、この「遠泳」は自分の抱いた夢を実現させようと果敢に挑戦したひとりの青年によって生み出されたのは、あまり知られていない。

ドーバー海峡を見渡せるイギリスのアドマイ埠頭に何度となく足を運んでは、潮風にあたりながら「この海峡をいつか泳ぎ渡ってみせる」と心に固く誓ったのは、当時27歳の若者マスコー・ウエップその人である。

彼は手に入れた海図と昼夜を問わず向かい合い、潮の流れや風の向きなど周到な準備を整えた。

そして、見慣れた埠頭の景色をあとに、ひとりフランスを目指して泳ぎ始めたのは1875年8月24日のこと。

予想しきれなかった疲労感や孤独感との戦いであったのは想像に難くない。

おそらく何度もの挫折感に襲われたのだろうが、それを必死に絶え続け、夢にまで見たフランスのカレー海岸

に泳ぎ着いたときには、すでに 21 時間 45 分が経過していたのである。

噂を聞きつけ、その快挙をひと目見ようとつめかけた大勢のフランス人に迎えられ完泳に成功。

その後「遠泳」は人気のスポーツとして活況を呈し、ドーバー海峡は「遠泳」のメッカとなったのは周知の事実。

四方を海に囲まれた日本でも、一時期この「遠泳」は学校体育を中心にかなりの頻度で実施されていた。

しかし、「危険だ」「海が汚い」などの理由で、誕生からわずか 1 世紀しかたっていない今日、「遠泳」は見向きもされなくなった。

足もつかない、底も見えない海で泳ぐのは確かに恐怖だ。しかし、それ以上に恐ろしいのは、本当の海を知らない若者が増えることではないだろうか。

3 【女性用水着の昔】(イギリス)

19 世紀初頭のイギリスは、「慎み深く」生活することを最も重視した時代だった。

「脚」という言葉を口にただけでワイセツとみなされ、コンサート用ピアノの脚さえ布で覆い隠さなければ使用できなかったほどだから、その徹底ぶりは想像を超えている。

もちろん女性が素足を見せるなどもってのほか。当時流行した海水浴の水着姿がそれを見事に語ってくれている。

「女性用の水着は、ひざ上 3 インチ以上におよんではない」との取り決めがあるにつけても、舞踊用のロングドレスの袖と裾を極端に短く切ったような上着に、脚にピタリと張りついたようなズボン。さらに、兵士がはいた脚絆を思わせる編み上げ式の靴下に布製の靴。とても泳ぐことが念頭にあるような水着とは思えない代物である。しかも、着替えは厳重に囲いをした更衣室で行い、海に入るには更衣室に直結したカーテンで隠された階段を使用するもののしさだ。

いつの世でも、気にかかるのは異性の視線。貞淑を求めた当時であって、男性が出歯亀趣味に走ったのもうなずけないではない。女性たちはいやがうえにもガードを固くせざるを得なかったのだろう。「肌を人目に触れさせない」。これこそが、当時の水着の目的だったのだ。

今年も海水浴シーズンがやって来る。客足も以前に比べ減ってはいない。露出度の高い水着は、今シーズンも人気の衰えを知らないという。

さて、19 世紀と 21 世紀。どちらに軍配をあげます？

4 【古代の石鹸】(イタリア)

古代ローマ人は風呂が大好き。

それは、古代ローマ帝国が、破竹の勢いで領土を拡大していた頃に作った都市の遺跡を眺めてみれば一目瞭然だ。蒸し風呂、熱湯風呂、冷水風呂、ロバの乳風呂と多種多様であり、あらゆる種類の風呂が、ズラリと並んでいる。

これらの風呂は、美容・健康・清潔など用途に合わせて使い分けられていたという。そこで気にかかるのが「石鹸」だ。

現代の石鹸は、脂肪分に苛性ソーダを加えたもので泡立ちもよく汚れがきれいに落ちてくれる。しかし、古代ローマの時代にそんな代物があるはずがない。さて、どうしたのだろう。

当時使用されていた石鹸の代用品は、「粘土に灰と油を混ぜてよくこねたもの」や「天然の炭酸ソーダを練ったもの」だったそうである。私はこの石鹸代わりの練りものを実際に使ったことはないのだが、これを使用して入浴した後は、かなり皮膚が乾燥したり、固く突っ張ったようになるのだそうだ。だから、古代ローマ人は入浴後、香油を体に塗って入念にマッサージを行い、肌の乾きを癒したのである。

紀元前 21～22 世紀のバビロニアや古代エジプトですでに使われていたこの石鹸代わりの練りものも、古代ローマ帝国が滅んだ後は、入浴を好まなかったヨーロッパ人にとって無用の長物でしかない。入浴しないヨーロッパ人はせいぜいアルコールに浸した綿で顔を拭くぐらいだから、体臭はスゴかったに違いない。

そこで登場したのが“香水”や“オーデコロン”なのだ。強烈な香りの香水やオーデコロンを全身にぶちまけ、鼻が曲がりそうなほど臭い体臭を消そうとしたのである。みんながみんなつけて歩いているのだから、街中はむせかえるようなニオイだったのではないかと想像できる。

古代ローマ人はキレイ好きだし、お肌もスベスベして美しかったのだろう。ふと頭に浮かんだのはミロのヴィーナスの美しい立ち姿である。

5 【古代ローマの大浴場】(イタリア)

ローマを代表する遺跡のひとつにカラカラ大浴場がある。皇帝カラカラを記念して、後の皇帝ディオクレティアヌスが建てさせたものだ。

収容人数 1600 人とも 2300 人ともいわれ、その壮大なスケールと豪華な内装は当時のローマの力を見せつけるに十分であった。

テピダリウム(採暖室、暖かい部屋)、フリジダリウム(冷水浴場)、カルダリウム(温室、ぬるい部屋)のローマ時代の浴室には必ず備えつけられた三種類の浴場はもとより、高さ 10m を越す天井に豪華なドームをもった部屋が 60 以上もあったという。それだけでは

ない。傍らには屋外競技場やスイミングプールも設置されていたのだから、さながら大都市のオアシス「裸天国」といったところだろう。

この大浴場を利用するローマ人は、ここを世界最高の社交場と考え、訪れる人たちは、華麗に着飾り、ご婦人方は金、銀、象牙などあらん限りの財宝を身につけて“ご入浴”をしたのである。

もちろん、この大浴場は保健衛生あるいは、身体強化の目的として当初は建設されたものであったのだが、ときを経るごとにここは酒池肉林の場と姿を変え、吐いては飲み、飲んで湯につかったり蒸気に蒸され、異性と戯れてはばからない放逸不善の舎となってしまったのである。

いうまでもなく、心身を清めるために足繁く通った人もいたであろう。しかし、ローマの歴史家プリニウスが語るように「ローマの衰亡はカラカラ浴場から始まった」のは、まぎれもない歴史の1ページである。

6 【風呂好きの古代ローマ人】（イタリア）

異常気象のせいだろうか、夏になると毎日うだるような暑さに見舞われる。クーラーを使用しても追いつかない蒸し風呂状態だ。座っているただそれだけで全身からベトついた汗が噴き出してくる。そんなときの唯一の清涼剤がシャワーである。

一瞬にして暑さは消えてしまう。だが、何か物足りない。

どれほど暑くても浴槽に張った湯にどっぷりと体全体を沈ませないと気がすまないからだ。「やはり日本人なのだ」。流れ落ちる湯に顔を濡らしながらそう考える。

ここで古代ローマ人に登場してもらうのは唐突な気もするが、彼らはわれわれ日本人が及ばない歴史の長さをもち、教えられることも多く、そのすごさに圧倒されるからだ。

しかし、ひとつだけと言ってもよいかもしれないが、日本人と古代ローマ人の共通点がある。それはどちらも「風呂好き」だということだ。

古代ローマ人は、遺された建築物からも理解できるように、壮大なスケールの浴場を無数に建てている。しかも、浴槽にたつぷりと湯を張っていた。彼らは、シャワーを好まず全身を湯につける全身浴を愛好し、日本人同様汚れを洗い流す際には浴槽外の大理石が敷かれた床に腰を降ろして行ったのである。今日の西欧人が湯船を泡だらけにしてしまう体の洗い方とは明らかに違う。

さらに、古代ローマの人たちは一日の仕事を終えてゆっくり風呂に入った後、楽しい夕食についていた。まさに日本のお父さんの姿だ。

「日本人と古代ローマ人」一意外な所でつながった。

とはいえ、どんなにひざを折り曲げても全身が湯につからないのが、わが家の現実だ。

7 【オーデコロンの語源】（イタリア）

私は人一倍汗かきである。他の人はスッパリした顔なのに私だけなぜか汗をかく。しかも大量に。だから、どうしても体臭が気になってしまう。

そんなとき、つい手が伸びるのが香水の瓶。自分の汗臭さを何とか消してしまいたい。そんな思いで体中にふりかける。すると、今度はその香りがきつ過ぎて気持ちが悪くなってしまう。本当に体のニオイというものは難しい。

さて、そんな香水の中でよく耳にするのがオーデコロン。体をふくときに使う主成分がアルコールの化粧水だ。私は使ったことがないからどれほどの効果があるのかさっぱり分らないが、この語源には興味をもっている。

ときは、古代ローマ時代。極悪非道で悪名高い皇帝ネロの母、アグリッピナがその主役である。彼女はネロを皇帝にするために何度となく悪事を働き、とうとう毒キノコで今の皇帝を暗殺することを計画・実行した冷酷な女性である。

彼女の生誕の地は現在のケルン。どういういきさつかは定かでないが、当時の皇帝は彼女にちなんでこの地に退役兵植民地 (Colonia Claudeia Ara Agrippinensium) を築く。そして、ケルンという地名はこのコロニア (Colonia) が転訛したもので、オーデコロンとは「ケルンの水」という意味なのだそうだ。

美しいものにはトゲがあるとよく言われるが、素敵な香りにも過去の暗い影が漂っているということか。それにつけても、私の汗臭さはどんなドラマも打ち消すほどの強烈であるのは確実である。

8 【大盤振舞いのつもりが・・・】（イタリア）

世の中には人気を得ようと妙に気前のいい人がいる。それに乗って利益をむさぼる方も悪いのだが、しょせん人気取り。いつかは化けの皮がはがれるのがおちだ。今回はそんな大盤振舞いが功を奏して、ついに皇帝にまで登りつめた古代ローマ人ハドリアヌスの笑えぬ話。

舞台は古代ローマの公共浴場。

ハドリアヌスが立ち寄った浴場で、一人の退役兵がレンガ造りの壁にひたすら背中をこすりつけている。「なぜそんなことをしているのか」

ハドリアヌスの問いかけに、退役兵は「自分は金がなく、背中をこすらせる人間を持つことができません」。

そう、古代ローマ人は浴場でストリギリスと呼ばれる金属製の垢取り器を使い、自分が養う人間に背中などをこすらせるのが入浴法の一つだったのだ。

ハドリアヌスは即座に、そのための人間と、今後養っていけるだけの費用を彼に与える決定を下した。それまではよかった。

次の日、浴場の異変を知らされたハドリアヌスは出かけてみたものの開いた口がふさがらない。一列に並んだ無数の老人たちがせせと浴場の壁に背中をこすりつけているのではないか。もちろん目当てはお恵み。

さすがのハドリアヌスも苦虫を噛み潰した表情で一同に宣言する。

「皆の者、それぞれ隣の者同士で背中をこすり合うようにせよ。これはわが命令である。」

お金に糸目をつけないのは民衆にとっては嬉しいことかもしれないが、度を過ぎると何とやら。結局、ハドリアヌスはあまり良い評価を得ることなくさえない皇帝であったと史実は語っている。

9 【古代の浮き袋】（イラク）

「浮き袋」。だれもお世話になるあのドーナツ型の補助具。

つい最近まで、黒系統の目立っていた海やプールが、今では水彩画の花畑のようだ。大小さまざまな浮き袋に身をまかせ宇宙遊泳よろしく、ただ水面を漂っているだけ。

さて、この「浮き袋」。その発生の起源をひもとけば、気の遠くなるほどの歳月が刻まれているのに驚かされる。

歴史を遡ることじつに 4000 年。

古代 4 大文明のひとつのメソポタミア北部（現在のイラク）、アッシリアの兵士が河を渡るために使用した史実がもっとも有名である。

ビニールもゴムも発明されていないこの時代に浮き袋の役目をなしたのが、なんとヒツジの皮だったというから驚く。

ヒツジは、遊牧を生活手段とする民族にとって肉は食料、毛は衣料に絨毯、そして残った皮は広く活用された。浮き袋もそのうちのひとつ。余す所のない生きた宝石だ。

頭部と手首、足首の先をナイフで「スパッ」と切り取り、皮だけにした状態で切り口をヒモでしばって、息を吹き込めばできあがり。

この皮製の浮き袋は、おもに戦闘の際に使われたらしい。数名の兵士が命綱のごとくしっかりと抱きかかえ、まさに敵地へ突入しようとする図柄を彫った貴重なレリーフも発掘されている。

河には身を隠す場所などどこにもない。そのため敵に見つからないためのまるで獲物をねらうワニのような静かな泳ぎ方、いちはやく敵陣に泳ぎついたり、河に住む人食いワニから逃れるためのスピード泳、はたまた水中から射る弓や投石などの攻撃の仕方など特殊な訓練

が毎日のように続けられたにちがいない。

この浮き袋は、いまでもシルクロードの中心地パキスタン地方で、「ジャーラ」と称されて古来そのままに使用されている。

浮き袋が、今は人の命を救う大切なモノになっているが、その歴史は文明史とともにあると実感する。

10 【水着の話】（イラク）

しばらくぶりにプールへ出かけた。

というのも、物心ついたときから競泳選手としてプールづけになっていた私にとって、プールで「遊ぶ」という経験はごくわずかだからだ。

高い入場料金に驚くのもつかの間、華やかな水着姿の女性たちに目をパチクリ。

水玉あり、パステルカラーあり、おまけに超ハイレグときている。

ファッション誌からぬけ出してきたようなこの水着。その発生の起源が、血で血を洗う戦争にあるとは誰が想起できるであろうか。

B.C.13 世紀、古代オリエントで活躍する軍隊が主権を握るヒッタイトと、その王が神の化身であるとなえたエジプトの戦い（カディシュの戦い）で、兵士が泳いだときに着用したのが最初。

そのいでたちは、頭からスッポリかぶる T シャツ型の半ソデ姿で、丈はくるぶしの上までと婦人服でいう「ワンピース」といった感じのものと、武器を持つ腕を自由にするために、一方の肩をむき出したまま片側でつった「ロングスカート」風の服装の 2 種類が存在した。

どちらも、カラダの線がはっきりわかるほどピッタリとしており、裾の部分は自由に開くように工夫してある。

これらは、当時盛んであったボクシングやレスリングで身につけた陰部を隠すだけのフンドシ型とは明らかに異なる。

ここで見る泳ぎの装いは、戦闘の際のみの姿で、サカナを捕ったり、水遊びの時には 1 枚の布を「巻きスカート風」にまとっただけ。

つまり、毎日の衣服が水着に早変わりするのである。思いのほか、このスカート姿が、ほかの衣服に比べて泳ぎやすい。

泳ぐうちに、スカートが腰までめくれて両足が自由になるからだ。

日常生活から離れて久しい水着。

ドッキリ！させられる斬新なモデルがこれからもあふれるであろう。

平和な現代社会を象徴するはるかなる歴史の産物がここにもある。

11 【お釈迦さまの水かき】（インド）

「苦しいときの神だのみ」……心臓が張り裂けそうなほど緊張するその一瞬、誰もが「神さま、仏さま」と心に念ずるはず。

その仏さまこそ、仏教の祖お釈迦さまその人である。

お釈迦さまは、B.C. 5～6 世紀、北インドのカピラ王国に生まれ、皇子としてなに不自由なく暮らしていた実在の人物である。

29 歳で家出し、80 歳の生涯を終えるまでの難行苦行は、想像を絶するほどだ。

その仏教が、日本に伝来したのはかなり後のことで、6 世紀中葉、朝鮮半島の百済王国から伝わったとされる。

さて、真赤に燃える太陽の下、はたまた、あたり一面真っ暗になるほどの豪雨のなか、みずからの足だけを頼りに教えを説いてまわったお釈迦さまの身体、なかでも掌と足は興味深い。

古いブームの今日、掌をさし出して運勢を予想してもらうのはワクワクするほど神秘的。が、ここでの話は、手相ではなく「水カキ」の話。

白鳥などの水鳥が持つ、指と指の間の薄い膜のようなあの「水カキ」。

その「水カキ」が、お釈迦さまにもあったというから驚く。

お釈迦さまは、どんな人間よりもまた神々よりもすぐれている証として、32 の特別な肉体的特徴（三十二相と呼ぶ）を持っていたらしい。

そのなかの「手足網縷相」が、この「水カキ」の存在を裏づける。

この三十二相は、お釈迦さまの死後に現れるもので、信者の語り伝えにすぎないであろう。

ただ、「水カキ」を使って水中を自由自在に移動し、アッという間に河を泳ぎきったとすれば、それはもう、お釈迦さまにしかできない離れワザ。

ともあれ、泳ぎの技術がないに等しい当時であって、「水カキ」の効用を十分に知っていたとするならば、泳ぎに対するひとびとの意識が、予想以上に高かったためであろうと思わずにはいられない。

12 【ガンジス川の聖なる水】（インド）

独特の雰囲気、汗と吐息の入り混じったむせかえらんばかりの人ごみ。大声で客引きをする行商人と目が合って、そのスゴミに視線をそらしたつもりが、今度はヨーグルトの売り子とバッチリ。「たまらん」とばかりに人をかき分けかき分け進むうち、水を満たした小さな銅製の壺を売る店に行き当たった。

北インドのガンジス川西岸の小さな街ベナーレス。世界最古の都市のひとつとして悠久の歴史を刻むこの街は、ブッダ以前から破壊者シヴァ神の都市として崇めら

れている。

さて、話を戻そう。銅製の壺が穴があくほど見つめていたからかもしれない。店主が何やら手振りをして近寄ってくる。空を指したり、合掌したり、口を開けて壺の水を飲むまねをしたり。頭の中に？マークがいくつも出てきた私は、ただ愛想笑いをしながらそそくさと退散。

後にわかったことであるが、その壺が大切なのは容器じたいではなく入れる中身だったのだ。中に満たされた水は聖なるガンジス川のもので、人が死ぬとその人の口を開け、そこにその水を注ぐのだという。なるほど、店主の仕草に納得。日本でも「死に水」をとるといって、末期の水を口にふくませるのはよく知られるところ。インドと日本のつながりを垣間見た気がする。

隣で金糸や銀糸を織り込んだ民族服を着込んだ女性が、お祈りをした後、両手でガンジスの聖なる水をすくい上げ口へと運ぶ。信心深い私としては、なんとしてでも同じことをと水をすくい上げた。でも……。

どんなに勇気をふりしぼっても、聖なるガンジスの水を飲むことができなかった。

13 【大麻を風呂に使ったスキタイ人】（ウクライナ）

「〈スキタイは〉町も城壁も築いておらず」「その一人残らずが家を運んでは移動してゆく」――ヘロドトスの著した著書「歴史」の中の文章だ。

古代ユーラシアの草原を渡り歩いた遊牧騎馬民族の代表スキタイ人を紹介した一説である。イラン系民族とされるかたわら、モンゴル系民族であるともいわれたりする。何はともあれ、今日の中国大陸や、ロシア草原といった壮大な地域を駆け回り、その後の世界に大きな影響を与えたのは間違いない。

その遊牧の民スキタイ人は、移動生活の中、いったいどんな形で体を清潔にしようとしたのだろう。

唐突だが「大麻」と聞くと何を思い浮かべるだろう。アサから製した麻薬で、喫煙すると多幸感・開放感があり幻覚・妄想・興奮をきたす常習性の強い危険な薬物である。

先述した歴史家ヘロドトスは、当時のスキタイ人がこの大麻を風呂に使用していたとの興味深い記述を残しているのだ。

彼によると、スキタイ人は3本の棒を互いに寄りかからせてフェルトで覆ったテントを作った後、テントの中で真っ赤に焼かれた石を投げ入れる。

そして、人々は、大麻の種子を持ってテントに入り、その種子を先ほどの石の上に投げる。そうすると投げ入れられた種子はくすぶり始め、想像以上煙を出すのだそう。

あとはおわかりだろう。

風呂に入って彼らは上機嫌で、大声で歌い出すやら、

うなり出すやら。くれぐれも言うておくが、これは紀元前 4 世紀頃の話である。決してマネしてはいけない。

14 【やはりあった！水の伝説】（ウズベキスタン）

ウズベキスタンを旅した時の話である。

水の伝説を今に語り継ぐのは、「世界で最も美しい街」と称されるサマルカンドから西へおよそ 270km。砂漠のオアシス都市として古くから有名であったブハラという街である。

この街は、もともと『チャシュム・アユーブ』と呼ばれていたのである。チャシュムとは“泉”、アユーブとは旧約聖書に登場するヨブのことなのだそうだ。

預言者アユーブが、「水が欲しいのです」との砂漠民の願いを受けて、自分の持っていた棒を地面に突き刺したところ、泉が湧き出し、民衆が生活できるようになったという。それが伝説のあらましである。もちろん今も、こんこんと水がわいているという。

現在は直径 1m ほどの井戸の形になっているのだが、不思議だったのは井戸の前に蛇口が 4 つ設けられ、アルミ製のコップが同じく 4 つ、整然と並べられていたことだ。今も水が湧き出しているというけれど、「本当は水道の水じゃないかしらん」と思いつつ、コップに水を入れた方がいいが、次の話を聞いて手が止まった。

昔、病気にかかったこの地の妃がこの水を飲んで治ったことを聞きつけ、多数の伝染病患者がこの水を求めてやってきたため、ハーン（王様）は水の使用を禁止したのだそうだ。伝染病が広がるのを防止するためであったのは言うまでもない。

「伝染病・・・」コップの水を眺めながら一瞬ひるんだ私。でも、「これは伝説の水なんだ！」と口に入れたものの、やっぱりウガイだけにしておいた。

15 【宮殿正門の天井プール】（ウズベキスタン）

アムール・ティムール。14 世紀中ごろ、中央アジアで生まれた征服王である。

たった一代で、しかも 30 年という短期間に東は黒海沿岸から西はインダス河流域までの広大な地域を版図にしたその勢力は、かのアレキサンダー大王を凌ぐとも劣らない。

その征服王の故郷を訪れた。旧ソ連から独立して間もないウズベキスタン。約 40km 行くとアフガニスタンとの国境という小さな街シャブリサブズがある。

この街最大の見所といえばアク・サライ宮殿だ。当時の面影を残すのはわずかに青と金色で装飾されたタイルがへばりつくかのように残る高さ 38m の 2 本の門柱のみである。これがアムール・ティムールが住んだ宮殿

の入口だ。この門は当時 60m の高さを誇っていたという。驚くことに門の天井部分がガラス製のスイミングプールであったというのだ。

まさか底まではガラス張りではなかったにしても、60m の位置にスイミングプールとは！しかも宮殿の正門の天井部分である。

そのセンスとスケールの大きさは、さすが世紀の征服王である。水はレンガ造りであったろうパイプではかなたの山脈から雪解け水を引いてきたという。

宮殿を訪れる諸地域の要人をここでもてなしたのか、はたまた戦闘に疲れたティムール自身が癒しのために使ったのか。いずれにしろ、プールにつかりながら眺める風景は、さぞ爽快であったろう。訪れる者は必ず思ったはずである。

「この王には逆らってはいけない。それは死を意味する」と・・・。

16 【アラル海の悲劇】（ウズベキスタン）

今、世界は環境問題を抜きには語れない。

「昔はこんな姿ではなかった」

海水浴に行つて海が汚くなったことを実感する人は少なくないはず。

しかし、水に体をつけられるならまだ幸せ。日に日にあったはずの水がなくなっていくのを目にするとするとこれは死活問題。放つてはおけない。

場所は中央アジアのカザフスタンとウズベキスタンに囲まれた国際湖アラル海である。1960 年から 2000 年までのたった 40 年間で面積は 3 万 km^2 に縮小し、水深が約 40m も浅くなってしまったのである。しかも今なお水量は減り続け 1992 年にはついに、湖底が現われアラル海は南北に分断されてしまったのだ。

この惨状の大きな原因は、ソ連時代の農業開発に端を発しているという。いわゆる「アラル海プロジェクト」である。1960 年に始まったこのプロジェクトは、アラル海に注ぎ込むアムダリア川とシルダリア川から大量の水を取水して、近隣の半砂漠地帯を農地に変えようというものだった。

結果、綿花や野菜は一時的に生産量を増やし大成功に思えたのだが、両河川からのアラル海への注入量が激減。先のアラル海枯渇問題ひいてはアラル海を取り巻く生態系変化を引き起こした。いまやアラル海は死の海となるのをただ待つのみ状態なのである。

私がウズベキスタンを訪れた当時、タシケント近くを流れるシルダリア川の水は豊かに思えた。しかし、その時も、現地の人たちは川の最終地点アラル海に話が及ぶと、ただ首を振るだけだった。完全にあきらめムードである。「話したくない」・・・暗い表情からはそう伝わってきた。

17 【古代人はクロールを知っていた！】(エジプト)

ずいぶん昔の話だが、3歳の娘にイヌの絵を描いてやったつもりが、絵を見た娘は「ブタ」だと答えた。

わが子ながらセンスのなさには泣かされるよ、と妻にその絵をみせたところ「原始人だってもっと上手よ」と素っ気ない。

確かに、無文字社会にとって「絵」は会話を成り立たせる唯一の方法。ある程度の正確さが必要であったのはまちがいない。

そんな絵文字の代表格は、言うまでもなく古代エジプト時代に生まれた象形文字（ヒエログリフ）である。

19世紀初頭までその意味すら皆目わからず、いまだに謎の部分は数しれない。が、解読された文字の中に大変興味深いものがある。

それは、クロールとおぼしき泳法で泳ぐ男性が克明に彫られ、その人物の前にはギザギザの波紋が規則正しく描写されている。これは「ネブ(nb)」と発音し、まさしく「泳ぐ人」と読ませているのである。

古代エジプト王国は、ナイル河を挟んで誕生した文明だ。河を渡る船の建造など、ピラミッドを築き上げる技術をもってすればわけのない話。

しかし、ときには強風にあおられたり、大波にのまれたり、満載の積み荷もろとも沈没する事故も頻繁に起こったはず。そうなれば、決死の覚悟で向こう岸まで泳ぎ渡るしか助かる道はない。

ところが、当時のナイル河には獰猛な人食いワニのナイルワニが、ウジャウジャと生息していたからたまらない。

むき出しのキバをギラリと光らせ、ガブリとやられたらひとたまりもなくあの世いきだ。

だから、かなりの泳力と技術が要求されたのは言うまでもない。

こんな事情から、「泳ぐ」という身体活動を国民に知らせる意味でも文字化が必要であったのだろう。

ともあれ、だれが見ても理解できるくらいの絵は描きたい。だって、ネコのつもりがやっぱり「ブタ！」では、それこそ絵にならないもの・・・。

18 【古代人の背泳ぎ】(エジプト)

近代泳法の中で唯一、仰向け状態で泳ぐ「背泳ぎ」。顔が水面上に出ているために呼吸が比較的自由。というわけで、初心者指導にも最適だと言われる。

けれど、あにはからんや、授業の初歩段階でエレメンタリーバックストロークを取り入れるのだが、鼻や口から容赦なく侵入する大量の水でアップアップ。この世の終わりと言わんばかりの表情で、もがき苦しむ生徒たちの姿は、あまりにもかわいそう……。己の指導技術の

稚拙さをただ反省するばかりだ。

さて、この「背泳ぎ」の発生はいつ頃だったかは、正直なところ明らかにされていない。

歴史書をひもといてみても、詳細が載っているのは16世紀初頭に著された「コリュンペテス」が最初だから、その歴史が意外にも新しいかのように錯覚してしまう。

だが、泳ぎの人類学を専門とする私にとっては、全く腑に落ちない。その理由は単純明快。クロールの起源があまりにも古く、誕生の背景が古代人の生活と密着しているからにほかならない。

そこで、古代生活の証言者ともいえるべき、一つの壁画を眺めてみることにしよう。

古代エジプト時代に建てられたラムセスⅡ世(B.C.13世紀)の葬祭殿を飾ったレリーフ（浮き彫り）は、ラムセスⅡ世率いるエジプト軍対ヒッタイトの大軍の戦争（カディシュの戦い）の描写である。

その図柄には、血なまぐさい海戦の様子だけでなく、海上で背浮きらしき動作をする兵士や、背泳ぎの姿勢で懸命に人命救助を行う兵士の姿が所狭しと描かれている。

この図を見るたびに、背泳ぎが水中戦での重要な戦闘技術であったり、「人助け」という非常事態に備えた専門技術をそれぞれの兵士が会得していたのではと想起してしまう。

とまれ、これはクロール同様、古代エジプト人が、想像を超えた水泳能力を持っていたことの証なのだ。

19 【水と時間の因果関係】(エジプト)

世の中に「時間」がなければ、いったいどうなるのだろう。

正午を境とするAM（アンテ・メリディウム）やPM（ポスト・メリディウム）がなくなるから、学校や仕事に遅刻する心配は全くない。

ましてや、競泳や陸上などの日本記録や世界記録などもこの世に存在すらできなくなってしまう。

100分の1秒を競い合う過酷なレースが繰り広げられるのは、「時間」がそこにあり、人類がそれを自由に計測できるからである。

さて、謎に満ちてとらえどころのない「時間」を計ろうと試みたのはほかでもない古代エジプト人である。彼らはまず太陽の照り具合で起こる影の長さの変化で、時間が判断できることを探り当てた。いわゆる“日時計”だ。

けれども、この日時計は夜になってしまうと、なんの役にも立たない。ヒトはまた暗黒の時のない世界へと迷い込んでしまう。

そこで、古代エジプト人は夜の間も時を刻めないかと

頭をつき合わせて思案した結果、とうとうある発見をしたのである。

地球の恵みである「水」は昼夜を問わず流れている。もし、その流れの速さを一定に保ち得たとしたら・・・。「水時計」の誕生の瞬間だ。

水を雪花石膏の容器から外へ流し、減っていく目盛りを読む「流出型」と、容器の中へ入ってくる水で上昇する目盛りを記録する「注入型」の二種類が発明された。

古代エジプト人の創造力の偉大さには毎度のことながら、ただ脱帽させられるばかりだが、満々と水をたたえるナイル河に育まれた古代エジプト文明ならではの大発見と言えないだろうか。

それにしても、水によって正確に刻み込まれ始めた時間を、水の中でいかに短縮できるかを競う「競泳」。

これも歴史が織り成す因果のひとつなのかもしれない・・・。

20 【神妙だった古代の“水の世界”】(エジプト)

古代のヒトの名前には、生まれた土地の名や誕生する瞬間の状況などによってつけられたものが少なくない。イスラエル民族をエジプトの圧政から解放した宗教的指導者モーセもその一人である。

エジプトの王(ファラオ)が、生まれてくるイスラエル人の男の子はすべてナイル川に投げ込むようにと命令を下した際、モーセの真の母親はパピルスで作った箱舟に生まれたばかりのわが子を入れ、ゆっくりとナイル川の岸に浮かばせた。プカプカと流れるその箱舟を発見したのは皮肉にもファラオの娘だったのである。彼女は、その子を養子として育てることになるのだが、つけた名前がモーセ、すなわち「水から引き上げられた子」という意味だったのだ。

モーセについての記述は、旧約聖書の「出エジプト記」に詳しいのだが、例えばイスラエルの民を引き連れてエジプトを脱出する途中、海を渡らなければならなくなったとき、モーセが海の上に手を伸ばしたところ、海はまたたく間に二つに分かれ、左右に水がうず高く壁のようにそびえ立ち、乾いた大地をイスラエルの人々は対岸まで歩いていくことができたのだ。追ってきたエジプト兵がその地に馬車を乗り込ませるや否や海の水が轟音とともに大地を飲み込み全滅させてしまったという話はあまりにも有名である。また、飲み水がなくなった折には、手に持っていた杖でモーセが岩をたたくと、その岩から水があふれ出してきたというように、「水」の話にはキリがない。

それもこれも、古代の人々が水の世界ほど神妙なものはなく、水を自由に操る力こそが神の力と考えたからに違いない。だからこそ、「水から引き上げられた子」モーセが繰り広げる数々の奇跡が、「水」と深く結びつい

ているのだと私は信じている。

21 【古代の川下り】(エジプト)

エジプト人は毎日、ナイル河の流れに目を向けていた。なぜなら、今のような灌漑技術を持ち合わせていない彼らにとって、頼りはナイル河の氾濫がもたらしてくれる田畑への潤いだけだからである。

しかし、それも限度を超えない程度での話のこと。アッという間にこの世のすべてを飲み込んでしまう大洪水は全く別問題である。

そこで登場するのが「ナイロメーター」。いわゆる水量測定器だ。ナイル河の水量を確実に刻んでくれるから、人々も安心して暮らせるのだ。これこそ人間の知恵の結晶であり、エジプト人の生活必需品なのである。けれども、それ以上に驚かされるのは、その値をひとときも欠かさず観測する測量士の力量ではないだろうか。

彼らは日々刻々と変化する水量を正確に記録し、その水量が異常な動きを見せ始め、ついには危険値を越えたことを確認するや否や、危険を知らせるために猛ダッシュで最上流から舟を漕ぎ出すのである。

下流に位置する首都周辺では、そうとは知らない何万人にも及ぶ庶民たちが、和やかに生活を楽しんでいるにちがいない。漕手の指名はただ一つ。

怒涛のごとく押し迫るナイルの流れよりも速いスピードとはどんなものだろう。当時の漕手たちの実力は、現在とは比較にならないほど優れていたということか。

それを知る術は今にはなにもない・・・。

22 【古代の自動販売機】(エジプト)

およそ 20 年ほど前の話である。

灼けるような暑さのなかで、威風堂々とその姿を現すピラミッド。長年の風雨にさらされ、いまにも崩れそうなスフィンクス。乾いた空気の香りを日本の地で懐かしんでいるとき、悲報がまいこんできた。日本人を含む大勢の観光客がテロの犠牲になってしまった。恐怖というより堪えようのない怒りを覚える。

さて、エジプトと言えば、古代文明の雄。そのはかりしれない創造力と技術力は、現代社会をも凌駕すると言っても過言ではない。

「水」の世界でもしかりである。今日、道を歩けば棒に当たるではないけれど、必ず飲料水の自動販売機が目飛び込んでくる。ノドがカラカラに乾いているときなどは、冷たい飲み物が手軽に飲めるとてもありがたい機械だ。驚くなかれ。なんとこの自動販売機がおよそ 2000 年も前のエジプトにすでに存在していたのである。

時は紀元前 215 年。「聖水」自動販売機は設置された。

高台がついた筒型の容器で、上部には硬貨の投入口が、

下方には水が流れ出す蛇口が備えつけられている。

投げ入れた硬貨が容器の中にある受け皿に当たり、その重みで受け皿が傾く。すると受け皿と反対側について今まで蛇口にフタをしていた栓がもち上がり、受け皿が元の位置に戻るまでのしばしの間、水がゆっくり流れ出てくる仕組みとなっているのだ。今なら、ちょうど水洗トイレを思い出してくれればいい。

はるか 2000 年も昔、古代エジプト人は自動販売機を考案していたのである。彼らの思考能力にひたすら頭の下がる思いである。

古代人の知恵を肌で感じ、現代を見つめなおそうと足を運ぶ人々もたくさんいるはず。なのに、今回、古の息吹を与えてくれるかわりに、銃弾の嵐を浴びせかけるとは。

そんなバカな話があるのか。

エジプトは文明発祥の地だぞ。

犠牲になった皆様のご冥福を今もお祈りするばかりだ。

23 [10m ダイブが成人式] (オセアニア)

高さ 10m の飛び込み台から見下ろすプール。

まかり間違えば、そのまま外へ飛び出して「グシャ」といってしまうのではと思えるほど小さいプール。いやはや“勇気”が試される瞬間だ。

恐怖と不安を乗り越えるこの“勇気”の持ち主こそが、成人男性の証と信じる国は、今もいたところで見ることができし、それにまつわる儀式も数え上げたらきりが無い。

なかでも、赤道直下に広く分布するオセアニアの小さな島、ベラウベラ島で伝わる成人式はきわめて興味深いものだ。ベラウベラ島の少年は、12 歳ぐらいになると成人式に参加しなければならない。12 歳とはちょっと若い気もするが、少しでも早くから一人前の仕事をやってほしいとの願いが込められているのかもしれない。

近くのジャングルから伐採してきたのであろうか、海の中で 3 本の丸太を三角錐状に組み立て、大小さまざまな太さの木の棒を縦へ横へと無造作につなぎ合わせて固定する。

高さ 10m 弱の成人式用の櫓（やぐら）の出来上がりだ。

成人式を迎えた少年たちは、われ先にとその櫓に登っては Teppen から両手を大きく広げて、夕日に赤く染まった海へ一気に飛び込んでいく。

それも、足からではなく頭からだ。

周りでは、いまだ成人に達していない子供たちが、「早くやりたい」と羨望の眼差しで見上げているのが印象的である。

四方を海に囲まれて生活する島民にとって、海はすべ

てを与えてくれる大切な場所なのだ。だからこそ、男たちにとっての海は、人生の舞台とも言えよう。

海には危険が山ほどひそんでいる。一步間違えれば「死」を意味するからにはほかならない。そんな大自然に“勇気”を奮い起こして挑戦するダイビング。少年たちに海の男としての自覚が芽生えてくるのは至極当然のこと。

飛び込み台で足をブルブル震わせていては、大人にならないのである。

24 [古代のボートレース] (ギリシャ)

いよいよ東京オリンピック・パラリンピックの開幕である。水泳界ではメダル有力候補の瀬戸大也選手をはじめ、日本選手の活躍を胸躍らせて期待する。

オリンピック発祥の地である古代ギリシャには、オリンピック（オリンピア）の他、イストミア、ピュティア、ネメアと呼ばれた葬祭競技会が 4 年に 1 度開催されていた。

なかでも、ポセイドンの神を称える「イストミア祭」とアポロの神を祭る「ピュティア祭」には『水』に関わる唯一の競技“ボートレース”が存在したのである。

開催総数 293 回と、目がくらみそうなほど長い歴史を持つ古代オリンピックにさえなかったというのに・・・。

ボートレースは、今日でも当てはまることかもしれないが、ボートが目の前を通過する瞬間以外は、揺れる水面を眺めるだけ。今ひとつ面白みに欠けてしまう。

そのため、「見るスポーツ」の価値をすでに認識していた古代ギリシャの人々にとって、“ボートレース”は魅力あるスポーツとは映らなかったのではなからうか。

だからこそ古代オリンピックの種目になり得なかったとも言える。

それでは、なぜイストミア祭やピュティア祭では行われていたのか。この二つの大会は、オリンピックに比べると規模も小さく、さながら国民体育大会というところ。

ボートレースは、その性質上、長い川岸にずらりと観衆を並ばせる。集められた観衆すなわち国民は、レースの面白さよりも宗教儀式である葬祭競技をたった一人で取り仕切る権力者の威信をいやが上にも心に刻み込まれてしまう。

このボートレースこそ、なによりも効果的な国家統制の「政略的活動」であったからと推察するのは早計だろうか。

スポーツと政治・・・絶つことのできない因縁の始まりは、古代文明を創り上げた河の流れにも澱んでいたということだろう。

25 [ナルシストの語源] (ギリシャ)

春の訪れを知らせてくれる花に「水仙」がある。早春

に咲くのは黄水仙だが、冬には白い華麗な6枚の花びらが見事に開く。

この水仙のことを、英語では一般的にナルシサス(narcissus)と呼ぶ。

名前の由来が、水と深いかわりがあるとなれば一層興味がわいてくるし、それ以上に可愛らしさが増してくる。

ギリシャ神話に登場する美男子は数えきれない。

そのなかでも、樹木や河川の精霊(ニンフ)の美女エーコーを失恋させるばかりか、その姿を消し、声だけにしてしまったナルキッソス(ナルシス)は群を抜いていたという。けれども、あまりの美しさゆえにナルキッソスは悲劇に見舞われてしまう。

泉の水面に写った自分の顔を、泉に住む水の精だと思い込み恋に落ちてしまうのだ。

くる日もくる日も、自分の顔に会うため、泉にやってきては1日中見とれていたナルキッソス。

みるみるやつれてしまい、とうとう思いあまって水の中へ身を投げ、溺死してしまったのである。

そして、彼は水辺に咲く水仙に姿を変えてしまったという話が今に伝わり、そこから自己陶醉型の人をナルシストと呼ぶことになる。

ところで、こんな神話が誕生するのは、「水」が鏡のように美しかったからにほかならない。

目の前を空ビンやビニール袋がプカプカ流れ、水中は視界ゼロに近いと環境汚染で悩まされる今日の海では神話の「し」の字も浮かびはしない。

水澄みて恋する瞳がよくのぞく

(加藤知世子)

こんな流麗な俳句が詠まれた頃の日本はどこへ行っていたのだろう。

ナルシストばかりが集まって、むやみやたらと海や河を汚したあげく、水を飲むことさえままならぬ今日である。

神話の教える自然の大切さを、真摯に受けとめるべきではなかろうか。

26 【イルカの語源】(ギリシャ)

子供が生まれるたびに日に日に大きくなっていく奥さんのお腹を見て、女性はなんと偉大なのだと思ったものだ。それ以上に子宮は本当にスゴイと思わずにはいられなかった。なぜこんな話をいきなり始めたのか?—そう、今回は「水と子宮と魚」の話なのだ。

古代ギリシャで使われていたコインには、「イルカに乗った少年」の図柄が描かれているものがことのほか多い。

その少年たちは、児童神パライモーンであったり、有翼のエロースと呼ばれたり、はたまた美しく男性的な神

として知られているアポロンであったりする。

なかでもアポロンは、別名アポロン・デルピニオス(「イルカに乗ったアポロン」と称されるほどで、海の動物イルカととても深い関係があったことを示唆してくれている。

デルピニオスの原形であるデルフィン(Delphin)はいうまでもなくイルカを意味するのだが、その元となるつまり、Delphinの由来となったギリシャ語の“δελφί”とは、「子宮」を表現する単語であったことに注目しなければならないだろう。

すべての生命の源であるところの子宮とイルカの関係はいかに?

そこで話は突然日本に飛ぶのだが、日本書紀の冒頭に「国土が誕生したのは、たとえば遊ぶ魚のようだ」という文章がある。これは、魚を釣りあげるように島を海中から釣りあげたとする〈島釣り型〉神話に由来するもので、世界各国によく似た例が多数伝承されている。

つまり、魚の存在は国土の始まりを意味する島の誕生と同一視されていたのだ。魚をいわば「始原的な存在」として考えており、すべての源を象徴していたのである。

ギリシャにおいて子宮がイルカにかわったのも、洋の東西を問わず“魚”が国土の誕生を意味したからではなかっただろうか。

「イルカに乗った少年」ではなく、生まれてきた私の子供は女の子だったけど、今も美しく栄えあれと願っている。

27 【海の“濁った水”】(ギリシャ)

「海の水」を皆さんはどうイメージするだろうか。ちなみに、当時小学校3年生の息子は「うーん ちょっと汚い」。大学生の長女は違う。「キレイに澄んでいる」だ。この違いは何か。長女は海外旅行で見た南国の海が忘れられないのだそうだ。息子は毎年海水浴に行く海を思い出し、また学校で教わったことそのまま言ったのだ。

さて、この「海の水」。昔の人はどのようにイメージしていたのであろうか。西洋の古典ギリシャ神話では海水は泡だっており、さらに白く濁っているものとされていた。それは、かの有名な「ビーナスの誕生」と題された絵画でもよくわかる。ビーナスは、濁った白い泡の中から生まれているからだ。濁っているつまり、混とんとした状態から新たな命が誕生することに意味を持たせているのである。

さらに、地中海文化圏に伝わるウラノスとその息子クロノスの神話が注目されよう。クロノスは父であるウラノスを去勢させ、父の体から血と精液を取り出す。血は大地に降りそそぎ、大地のエネルギーとなったが、生命の源となる精液は海に降りそそがれるやいなや、海水は白く濁らせ、泡立たせたという。そして、その白い泡の

中からアフロディテ、後のローマでビーナスと称される女神が誕生するのである。

日本でも、泥海をかき混ぜて土地や人間を誕生させるといった神話が語り継がれていることを思い起こさせてくれる。「新たな生命を生み出す」ということで、海の水が濁っているとのイメージは古代世界では共通か。それにしても日本の海は濁りすぎ。新たな命など生まれそうにないと思うのは私だけか？

28 【邪悪な生き物だった？ “人魚姫”】（ギリシャ）

ウォルト・ディズニーのアニメーション映画「人魚姫」を娘に無理やり見せられた。ところが、淡い茶色の波打つ長い髪に、真っ白い肌。それに澄んだ緑色の尾と燃えるような赤い唇。胸こそ貝殻で隠されているものの、なんとも美しく大ファンになったのはこの私だった。

たとえようのない魅力をもつこの人魚姫は、なんと紀元前5世紀生まれ。ギリシャの詩人・ホメロスが叙事詩「オデュッセイア」に登場させたのが初めてである。その名は「セイレーン」。半人半鳥のセイレーンは航海をする男たちを魅惑的な歌声で誘っては、無残にも殺してしまう邪悪な生き物として描かれ、神話的英雄オデュッセイアはその甘い誘惑にも負けることなく航海を成功させるというのが概略だ。

しかし、古来から海は^{めいふ}冥府（あの世）の象徴として信じられていたため、海の神秘性や航海の厳しさなどと重なり合って、この半人半鳥のセイレーンは時が経つにつれ海の生き物といった伝承が主流となり、ついには半人半魚へと姿を変えることになってしまう。

鳥から魚へと姿を変えたセイレーンではあるけれども、伝説や神話の中で、その悪行をやめることはなかった。それどころか、歌声のみならず妖艶な顔となまめかしい輝きを持った肌も合わせ持つようになったから男たちはたまらない。いとも簡単に次から次へと航海者たちは暗黒の海へと引きずり込まれてしまったのは言うまでもないこと。

その不気味で暗いイメージのセイレーンが、恋とロマンに彩られるきっかけを創ったのは、童話作家アンデルセンであった。今まで常に悪者であったセイレーン、つまり「人魚姫」が、声をなくし、最後には水の泡となってしまう悲劇のヒロインになるのはだれもが知っている。

たとえ、セイレーンに語源を持つサイレンが“危険”を意味するとしても、人魚姫はいつまでも美しい姿でいてほしい。娘の心の中でも・・・。

29 【これぞ風呂の原型】（グリーンランド）

吐く息はもとより、口ひげすらも氷突くような寒さを生きるエスキモー。彼らの暖の取り方は実に単純だ、

外から見るとまるで土まんじゅうのような半地下型の家を村のあちらこちらに見ることができる。這いつくばりながら入口のトンネルを通ると、熱気でむせかえる空間に出る。

部屋を中心に据えられたいろりに赤々と火が焚かれてい

るからである。人々はここで、座ったり寝そべったりして玉のような大汗をかくのだ。いわゆる発汗浴だ。エスキモーたちは、この家を「カシム」と呼んでいるが、実はここは単なる風呂場ではないところにその特徴がある。

彼らは、このカシムを「男の家」と称し、既婚・未婚を問わず男たちが常にここに住み、儀礼を行ったりするというのである。つまり、カシムは住居兼儀式場でありなおかつ風呂場でもあるということになる。

エスキモーたちは、たっぷり汗をかくと、一目散にもと来たトンネルをくぐり抜け、外に積もった雪の中を転げまわったり、極上に冷たい水を勢いよくかぶって体を冷やすのである。また、あらかじめ氷に穴をあけておき、その中にたまった水に入ることもあるという。

部屋の中は、直火のためものすごい量の煙が充満する。天井には煙出しの穴は開いているものの、エスキモーたちは煙を吸わないように、植物の繊維で作ったマスクを使用することもある。

閉め切った部屋で火を焚き、体を暖めて汗をかく。この単純な直火型熱気浴こそが、世界の風呂の原型だとはあまり知られてはいない。

30 【女王ゼノビアが愛したハمام】（シリア）

10年以上続く内戦で多くの犠牲者を出し、国が崩壊してしまったシリア。厳しい現状のこの国を、私はこれまで3度訪れている。

大好きな古代都市遺跡「パルミラ」を見たいがためである。荒涼としたシリア砂漠の中央に林立する世界最大級の遺跡群で知られるここパルミラは「シルクロードのバラ」と呼ばれた悲劇の女王ゼノビアが君臨した都市である。

紀元3世紀。ゼノビアが活躍したこの時代、東にペルシャ、西にローマ帝国があり、パルミラはその対立する2カ国のちょうど中間点に位置した。

政治的な話は他にゆずるとして、パルミラの遺跡群の中で注目するべきものに、「浴場」がある。パルミラを中心を走る列柱道路脇に、深さ2mのプールをはじめ、いわゆるサウナのような蒸し風呂の施設や冷たい水を溜めた冷水浴場などが整然と設置されている。これが世にいう「ハمام」だ。

ここは、女王ゼノビアが疲れを癒しにたびたび足を運

んだとされ、別名「ゼノビアの風呂」と称されている。ただ、中東各地に今も残る「ハмам」と違うのは、ここはすべて自然の温かい湯を使用しているということだ。この地は地下から温泉が湧き出しているのである。

パルミラがローマの属国となっていた当時、女王ゼノビアは見事に装飾された柱に囲まれ、ほのかに湯気が上がるこの浴場でローマからの独立を決断したのかもしれない。パルミラがローマによって跡形もなく叩き潰され、ゼノビア自身も殺害されることを知ってか、知らずか・・・。

31 【ヤミ族の潜水漁法】(台湾)

台湾の小さな島、ランショウ島。周りを青い海で囲まれた波音がいかにも涼しい。

この島には、ずっと昔からヤミ族と呼ばれる少数民族が住んでいる。彼らの生活の糧は、もちろん海からの贈り物すべてだ。中でも、無数に生息する魚は良質のタンパク源として欠かせない。

ヤミ族の魚の捕り方は独特で「潜水追い込み漁」と名づけられている。

水中に網を張り、人が潜って石を打ち鳴らし魚を追っていくのである。シュノーケルやスキューバダイビングで使用するレギュレーターなど一切使わない。あくまでも素潜りを基本としている。

注目すべきは、彼らの潜水から浮上してくるまでの姿勢である。魚を驚かすことなく、スムーズに水中を移動しなければならない。それに、両手には追い込み用の石を持っている。使えるのは両足だけ。フィンのない素足でのバタ足は推進力に難がある。そこで、全員カエル足を使用することを身につけた。

今日では、平泳ぎのキックとして誰もが使用するカエル足だが「潜水追い込み漁」を行うヤミ族は、誰から教わったわけでもなく、昔々いろいろな体験をすることによって会得した。彼らにとっては伝統的な泳法なのだ。

また、日本や韓国でも「潜水漁法」は行われて今に伝わっている。もちろん、泳ぎ方はヤミ族のものと同類だ。つまり、現代の平泳ぎ系統の泳法はこういった潜水を主とする漁法の中から生み出されたものと考えられるのである。

32 【刺青と泳ぎの関係】(中国)

ヤクザ映画は、なぜか今も昔も人気がある。高倉健が、胸元から片腕出してすごむシーンなどは、確かに「ゾクッ」としびれるほどカッコイイ。

むき出しの肩から腕そして背中にかけて、緑・青・赤と色あざやかに竜が踊り、桜フブキが舞う。

首をすくめたくなるほどの迫力を持つこの刺青だが、

ずっと昔、海で生きるひとびとにとって、なくてはならない大切な意味があった。

刺青は、中国江南地方（中国揚子江以南の地：現在の上海あたり）で行われていた「潜水漁法」に起源があるらしい。

サカナから取れるタンパク質は、狩猟を生活の糧とする古代人にとって、かけがえのない食物資源だ。

彼らは、その知識を本能的に得ていたのであろう。

潜っては、泳ぐサカナや岩かげの貝を手づかみで獲ったり、石で作ったモリを使って漁を行っていたにちがいない。

古代のひとびとにとって、あたかも宝石箱のように映ったであろう海。

そこには、数知れない危険と神秘が、隣り合わせであることも事実だ。

自然と戦う古代人にとって、神の力を信じること、つまり、「まじない」によって未知なるものから逃れられると考えた。

刺青も、そのうちのひとつ。

トリやサカナの骨、あるいは、竹や木の刺などで皮膚に傷をつけ、樹液（ヤニ）や朱・緑青などの顔料を使用して色をつけていく。

サカナの「ウロコ文様」をカラダ一面に彫るのは、人食いザメの危害を防止するためであり「竜」の文様は、海や河川に宿る神様の怒りを鎮めるための、いわゆる宗教儀礼であった。

あるいは、海の男になるための証しを肉体そのもので語らせようと意図したものであろうか。

ただ、彫るときに激痛に耐え、その結果生じた今までは違う「新たな肉体」に、神の存在を信じたことだけは明らかである。

33 【真珠の歴史は潜りの歴史】(中国)

ダイヤモンド・ルビー・エメラルドなどの宝石は、女性のみならず男性をも別人のように飾ってくれる。

どちらかというと凹凸の少ない日本女性。そのソフトな顔には、真珠（パール）の乳白色のやわらかい輝きがよく似合っているという。

さて、この真珠は、別名「月の涙」と呼ばれ、中国では、月の化身であるとのいい伝えが残る。

現代のように養殖技術の発達していない古代、真珠は偶然の産物であった。

それだけに、貴重さが増し、ひとびとが手に入れようとやっきになったのもうなずける。

それもそのはず、古代の人々は、自分の住む地方にないものを手にするとき、かならず宗教的な意味を併せ持ったからである。

たとえば、中国では、真珠のとれる海や川は、その年

は豊漁が約束されたし、すりつぶした真珠は、不老不死の仙薬として服用されていたという記録も残っている。

偶然に発見されたにちがない真珠も、時を経るにつれ、富や権威の象徴として価値を持つようになったとき、真珠を専門的に集める人たちが出現したと想像できる。

潜るために必要な「泳ぎ」は当然のこととして、呼吸の停止方法、目標に向かってまっすぐに潜ることや、浮いてくる身体をいかに上手に、しかも長時間にわたって維持できるかなど特殊な技術を身につけていたにちがない。

まさに、スキンドайビングそのものである。

スキンドайビングが、真珠の文化史とともにあるとすれば、胸躍るロマンを感じないだろうか。

34 【アーティスティックスイミングのルーツは敦煌にあり！？】（中国）

華麗なる華が舞う。

えもいわれぬ優雅さに、ただウツトリと見とれてしまい、まばたきすら忘れてしまいそう・・・。

女性にしかない艶やかさだ。

アーティスティックスイミングは、高度に洗練された演技によって女性の「美しさ」を究極まで完成させようとする競技だ、と私は思う。

このアーティスティックスイミングは、20世紀初頭、「ウォーターバレー」と称され、万国博覧会にエキシビジョンとして披露されたのが始まりとされている。

しかしながら、歴史をひもといてみると、そうとばかりも言えそうにない。

知らない人がいないほど有名なシルクロードの伝説都市「敦煌」。

数えきれないほどの窟（ほらあな）のなかに、アーティスティックスイミングを想起させる北魏時代（386~534年）の壁画が遺されている。

あきらかに人工のものとわかる正方形に縁取りされた池は、清々しく澄んだ青色で、波紋一つ見つけることはできない。水面には、ピンク色をした蓮の花が芳香を漂わせながら浮かんでいる。

美しく化粧をした4人の女性は腕を上へ横へといっぱいに伸ばして、妖艶な舞をその池で演じている。この姿は現代のアーティスティックスイミングを想起させてくれる。今にも壁画から踊り出てきそうだ。

さらに、池の周りには、その美しい舞に誘われたのであろうか、羽衣を風になびかせながら飛ぶ天女の姿が、これまた見事に描かれてもいる。

この舞は宗教的儀式として行われていたか、あるいは宮廷で毎晩のように催されていたであろう酒宴に色を添えたのか、いずれにしろ、描かれた舞が格別な意味を持っていたことを明らかにしてくれる。

美しい音楽に、華麗なる舞、そして絶世の美女たち。

悠久の昔から、ヒトは「美」を追い求めてやむことをしらない。

アーティスティックスイミングの乙女たちは、やはり永遠の艶やかなる華なのである。

35 【水にまつわる漢字の風景】（中国）

夜のとばりをさえぎるサイレンと内臓にしみわたる警報音。

「火事だ！これは近いぞ」とふとんから跳ね起き、裸足のまま外へ飛び出す。

案の定、数キロ先で野火のような炎が、夜の闇を赤々と染めていた。

災いは忘れた頃にやってくるもの。

天災でも人災であっても不意をつかれるから防ぎようがない。

ところで、この「災」という文字をバラバラに分解してみると、おもしろいことに「川」と「火」の組み合わせになっていることに気づく。

そもそも、われわれの使う漢字は物の形をかたどった文字（象形文字）が変化に変化を重ねた結果できあがったものだ。

したがって、ひとつひとつの漢字には、考案された当時の習慣や思想が反映されていることになる。

では、「災」に隠されている秘密とは一体何か？

「災」の上の部位の「川（せん）」とは、屈曲した3本の水脈の豊かな流れを示している。つまり、満々と水をたたえた「川」を意味するのだ。

しかし、この川は豪雨により水かさが増すと、一気に洪水を引き起こし、生じた濁流は近辺の田畑や村をもの見事に飲み込んでしまう。

中国の人々は、これを「わざわざ」と呼んだ。「わざわざ」とはもともとこの「川」の文字だけが使用され水害を意味していたのだ。

さらに、この「川」に横棒を一本引いた「さい」という文字は、川の流れをせきとめることにより起こるわざわざいを示していたという。

今日の「災」のように、「川」の下に火がつけられたのは、人類の生活を脅かすわざわざいには、「水害だけでなく、すべてを焼き尽くす大火もあるのだ」との教え込められているのであろう。

ともかく、黄河によって育まれた中国文明で作られた「川」という字形は、それほどまでに洪水が民衆を苦しめた、という史実を我々に語り伝えてくれるのである。

36 【新年を祝う不思議な風習】（中国・タイ）

いや参った。頭のテッペンから足の先までズブ濡れだ。

女性はもっとかわいそう。化粧は剥げ落ちマスカラやアイシャドーがベトトリ流れて、それはもう大騒ぎ。

中国边境の地、雲南省でも、ラオスとミャンマーの国境を接し、タイ族が住む最南端の都市「西双版纳^{シーさんばん な}」を訪れたときのことである。

日本の正月にあたる新年祭が、4月中旬、「撥水節（水かけ祭り）」と呼ばれて盛大に行われる。

なにせポカポカ陽気の毎日だから、わが国でならコタツで丸くなって、ミカンでもほおぼる正月もこの地ではそうはいかない。

タイ族独特の民族衣装に身を包んだ美しい女性たちが、リズムカルな太鼓の音に合わせて華麗な舞を披露してくれ、しば見とれてしまう。

演技が拍手の渦の中で終了すると、ほんの一瞬の静寂が走る。と、「キャー」「ワー」という叫び声とともに、嵐でもきたのかと錯覚するほどの勢いで、水が飛び交い始める。「水かけ祭り」とは、文字通りむやみやたらと水をかけるお祭りなのだ。老若男女まったくおかまいなし。近くにいる者に思いっきり、しかも大量の水をザーッとかける。

イスに座ったまま、ア然とするその瞬間、私は滝のような水を、頭からドバツと浴びせられ、まばたきをする時間さえなかった。

我に返った私は、「ヨーシ」とばかりに、近くに転がるバケツ片手に群集の中へ飛び込むと、舟や水槽にためられた水を一気にすくって、そばにいたタイ族の女性におみまいする。しかし、水をかけられて怒る人は誰もいない。みんな笑顔で楽しそう。それどころか、合掌までしてくれるから驚きだ。

水稻耕作で生活するタイ族にとって、水は欠かせない自然の賜物。だれもが水の恵みを一身に受け、心から新年の幸福を祈っているのである。

それにしても、世界には思いもよらない不思議な風習があるものだ。

37 【「虹」と「竜」の接点】（中国）

夕立のあと、大空にさっと浮かびあがるのはキレイな虹だ。

虹の真下まで行ってみたいとか、虹に登れたらどんなにステキだろうと幼心をウキウかせていたから今でも私は虹を見るのが大好きだ。

ところで、「虹」という漢字にはどうして「虫偏（へん）」がついているのだろう。それを追求していくうち、意外な答えが待っていた。しかも「水」と深く関係していたのだから驚いた。

古代中国では、虹は「竜」。つまり、水の神様の一種と考えられていたそうである。へびを起源とする空想の

生き物である竜が、大空を舞い飛んでいる姿を虹に見立てたというわけだが、それを証明するには虹という文字を分解してみれば一目瞭然。

虹の「虫」は、古来からへびを意味するもので、「工」の字は天空をつらぬく意を持っているからだ。要するに、虹とは天空をつらぬくへびを表現していることになる。

しかも、虹はオスの竜だと信じられていたというから、昔の人たちの想像力は素晴らしい。

「メスは何？」

心配無用。メスもちゃんと用意されていた。竜のメスは蜺（げい）という呼び名を持っているのだが、辞書をめくると語意はナンと「つくつくぼうし」と出てくる。オスが虹でメスがどうしてセミなのかは、ボクの頭では今のところわからない。

さて、日本語の「にじ」は「ぬし」に由来するとされている。

『我がこの川のぬし 竜女なるが』

能の謡（うたい）である謡曲にはこんなセリフがある。これからもわかるように、「ぬし」は、山河池などに住みつき霊力を持つ生き物として考えられていた。わが国でも、昔からやはり「にじ」は、水の神様と大いに関係していたことが理解できるのではあるまいか。

そう言われてみると、虹は竜が飛翔しているように見えてくるのは私だけだろうか。

38 【優れた泳ぎ手 毛沢東】（中国）

今、怒涛の如く発展する中国で忘れてならない人物といえは毛沢東。

思想家にして革命家として知られる毛沢東であるが、最初に書いた著書となるとあまり知られていない。

意外にもタイトルは「体育の研究」。

その中で水泳の重要性を特に強調するかのよう書き記しているのは注目に値しよう。

彼自身、1966年7月に揚子江横断の大遠泳を行っている。幅数十キロを横断し終えた毛沢東の姿を見て、民衆は彼が文化大革命を強行する強靱な肉体と精神をもつシンボリックな人物として確信したのだという。つまり、「泳ぎ」がこれから変化する中国の将来を暗示させる役目を担ったということにもなる。

ただ、一説によると毛沢東にとっての水泳は、革命を成功させるためのたんなるパフォーマンスでしかなく、健康増進や成長といった今日的思考は全く働いていなかったともいわれている。揚子江の遊泳を終え、未来の中国に夢をたくしてこんな詩を詠んでいる。題名は「遊泳」。

才飲長沙水 又食武昌魚

万里長江横渡 極目楚天舒

不管風吹浪打 勝似間庭信步

(後略・・・)

(いま長沙の水を飲んだかと思うと、すぐに武昌の魚を食べる。万里の揚子江を今横に渡っている。泳ぎながら広大な湖北省の天を見ている。荒い波も強い風も気にならない。ゆっくり庭を散歩しているようだ。・・・)

優れた泳ぎ手であった毛沢東。中国の水泳選手が今日のように世界で活躍するとは予想だにしないだろうし、まさか北京でオリンピックが開催されるとは思ってもみなかったであろう。

39 【ローマ遺跡のスイミングプール】(チュニジア)

北アフリカの小国チュニジアを訪れた時のこと。アフリカというからには極度の暑さで身動きもできない。そう信じていた私は、サハラ砂漠の砂嵐で視界がゼロになるのに驚き、突然視界が開けたと思うと、その先に見える山の頂上に雪が積もっているのを見て二度驚いた。「アフリカにも雪が降る」。

思いがけない寒さに身震いしながら車を走らせ、最大の目的地スベイトラへ。チュニジアに残るローマ遺跡の中でも最も新しいこの地は、遺跡の保存状態もかなり良い方だ。

朝日を浴びて赤く燃えあがるように輝く神殿群の裏手に残る居住区。その中にお目当てのスイミングプールを発見！見事なほど完璧に近い状態で保存されている。縦、横約 20m、深さおよそ 3m の正方形で、横面に設けられた 7 段の階段を使用して水に入ったのだろうと思われる。もちろん、この階段も健在だ。残念ながら水は張っていないが、その水源はの東部を流れるスベイトラ川だが、今では完全に枯渇している。当時、この川の水を水道橋と地下に埋められた水道管を使って常時一定に溜められていたという。

夏になると 50 度にも上昇してしまう気候条件であれば、なおさら涼を求めるためのプールは必要であったろう。古代ローマ人といえば風呂好きで有名だが、水泳も楽しんでいただのかと想うと、これまで以上にグッと親近感がわいてくる。ただ、ここでどんな泳ぎをどういった形で教えていたのかは今後の調査・研究で解明できればと思っている。

アフリカの雲ひとつないコバルトブルーの青空とレンガ色がまぶしいプール・・・時の経つのを完全に忘れた。

40 「ヴァイキングの海水浴」(デンマーク)

ヴァイキングの郷里、北欧に出かけた。

1000 年もの昔、ノルマンニ（北方から来た男たち）と呼ばれ、ヨーロッパにおけるキリスト教国を脅かし震えあがらせたヴァイキング。彼らの活躍の舞台は、バル

ト海と大西洋に挟まれたかたちで横たわるスカンジナビア半島だ。

ここは、どんなに小さな地図を眺めてみても、海岸沿いはギザギザに細かい切り込みが入れられている。長い年月が折り重なってできた氷河の傷跡が生み出したフィヨルドである。

ヴァイキングが縦横無尽に駆け回ったこのフィヨルドで泳いでみたい。―これが私の今回の旅の最大の目的なのだ。

極寒の地で北の荒海に支配されているとはいうものの、たった 2 ヶ月ほどだが夏はある。眩しいほどに照りつける太陽光線は肌を刺すように強く、ひ弱にも見える色白の私の肌はみるみる赤く焼けていく。水温もほどよく泳ぐにはもってこいの条件だ。

海に飛び込むが、真横から吹く風は思ったより強く、なかなか前へ進めないものの、海面はナギの状態できわめて静か。ゆっくり漂いながら、ヴァイキング時代の伝説を思い浮かべていた。

ヒーローは泳ぎが達者でなければならないし、貴族は水泳で身体を鍛えていたのである。

あの角のついた鼻までかくす独特のヘルメットをかぶって泳いだのか、それとも毛布のように分厚い着物を身につけて泳いだのだろうか、いずれにしろシーズンは今と同じ夏だったにちがいない。

トップレスの女性に質問しようとするのだが、ボクの言葉じゃ通じない。ただのイヤラシイおじさんと思ったのだろう。眉間にシワを寄せながらサッサと場所を変えてしまった。

41 【天の声ならぬ医者声】(トルコ)

「安心なさい。あなたは必ず治ります」―病院でこう言われたら、やはりホッとする。ただし、科学の発達した現代での話。

しかし、それが古代ローマの時代だと知ったら、皆さんどう思います？

かの有名なカラカラ帝も訪れたという病院跡地アスクレピオスに足を運んだ。トルコでのことだ。

病院の中央付近であったろうと思われる場所に、地下道につながる穴がポッカリと口を開けている。カビ臭さを感じられるのは、今もここが湿気をおびているせいだからだろうか。階段をゆっくり降りる。さほどの時間がかからず暗さに慣れた目で見渡すと、ゆかの両脇に浅い水路が敷かれている。

当時、ここはふんだんに湧き水が出ることで有名だったそうで、だからこそ病院が建設されたわけだ。しかし、地下道になぜ水路？答えは簡単。

この地下道は、治療中の患者が散歩する道で、水路は流された水の音で心を癒すために設けられたものなので

あったという。「最近、癒しの音楽で水の音が効果的と、どこかで聞いたな」と妙に納得。

ふと見上げると、明かり取りのような穴が天井にポツンポツンと開いている。ボクは口をその穴よりしくポカンと開けて見ていると、「安心しなさい。あなたは必ず治りまーす。」

その穴に口を当ててうれしそうに声をかける現地の通訳氏。そう、患者はゆっくり水の音を聞きながら、天井から天の声ならぬ医者の方を聞いて、安心するという仕組み。当時実際に行われていたそうだ。

ウーンと響くその声を聞くと、驚くだけの様な気もするけど・・・。

42 【“平泳ぎ”は自然からの贈り物】（ドイツ）

中学生の自然体験を調査した結果、「カエルに触った経験がない」中学生が、なんと約 23%もいたという。

水質汚濁によって異臭を放ち、腐りきった都市部の河川では仕方がないが、少し田舎へ足を運べば、私の幼少の頃とはいかないうちでも、ピョンピョンと元気よくカエルが跳ね回っている。

スイスイと波ひとつ立てずに泳ぐかと思うと、愛嬌のある丸い目玉を水面上にプカリと浮かべたその姿には、子供ながら関心もした。

「腕は横へ大きく、キックはカエルのように足を広げて蹴りなさい」。平泳ぎを習い始めた頃の先生の言葉が、今も耳から離れない。

だから、子供たちに指導していると、ついつい同じ言葉を口にしてしまう。

ところで、腕を水中で広げる泳ぎを「平泳ぎ」の元祖と見なすとすれば、その歴史はかなり古く、旧約聖書の時代にまでさかのぼる。

紀元前 700 年頃の旧約聖書に記された「イザヤ書第 25 章」には、「両腕を広げるように伸ばして泳ぐ」と表現される箇所が見られる。

さらに、水泳指導書として世界最古と言われるニコラス・ビーンマンの著書「コリンベ(COLYNBE)」(1538 年)には、平泳ぎの章で「カエルの泳ぎを十分に観察し、それを模倣しながら練習に取り組むように」とある。自然から得られる知識をフルに活用しようというわけだ。

現代の平泳ぎが、カエル泳ぎにはほど遠く、合理的にしかもスマートに改良されていることは周知の事実。北京オリンピックでの北島選手の 2 冠達成で「平泳ぎ」はいやがおうでも注目をあびた。

しかし、その平泳ぎが、今では日々刻々と失われつつある自然からの贈り物であると知っている人は少ないにちがいない。

自然とともに歴史の 1 ページが消え去ろうとしている現状を、由々しく思うのは私だけではないはず。

43 【ヘビの脱皮は“復活”の証】（東南アジア）

世の中にはどうしても好きになれない生き物が一つや二つはある。

不気味な色の胴体を、音もなく滑らせ獲物を丸呑みしてしまうヘビ。

その姿を思い浮かべるだけで、私はまさしく狙われたニワトリ。全身トリ肌をブツブツと立てながら「コケッ」とも言えず腰を抜かしてしまいそう。

私にとっては、ただ気色が悪いだけのヘビも、「水」を語る際には決して無視できない存在。

「水は現世を作り出した源泉」とは、世界各国に残るあらゆる神話が伝える共通した天地創造のモチーフ。興味を駆り立てられるのは、そこへ登場する水を守る神様の顔ぶれだ。

「太古すべての事物がとぐろを巻いた水ヘビの口の中にあった」・・・ボルネオ南部に居住するカジュ族の神話の一説である。

これはほんの一例にすぎないのだが、海の神様や水の神様が大蛇あるいは竜の姿でいるのは、中国や日本はもちろん、遠くインド地方にまで及んでいる。

なぜ、水とヘビが結びつくのか。

ヘビは成長の段階で、脱皮することはよく知られている。古代の人々は、この様子を「生命の更新」と考え、死して再び蘇る「復活信仰」に結びつけたのである。

ところで「ナーガ信仰」と呼ばれる水神信仰は、特に稲作と関係深く、水田地帯にことのほか多い。

稲作民族にとって、定期的に訪れる雨季の適量な雨は、大地に潤いを与え、豊かな実りを約束するかけがえのないもの。

一木一草もはえぬ枯れ果てた大地を、生あるものにすればかりか、食する人類の活力をも生み出す水。

その水を司る神と「復活信仰」の象徴であるヘビが重なりあったのも至極当然の結果と言えまいか。

とすれば、ヘビや竜を祭る儀式や祭りが世界に多いのも納得できる。

44 【トイレの歴史と文明の関係】（パキスタン）

いつどんな国でも、旅に出ると真っ先に駆け込むのがホテルのトイレ。

前ぶれもなく突然襲いかかってくる下痢に備えるのは言うに及ばず、廁を見ればそのホテルのランクはもちろん、その国の衛生状態、ひいては政治や経済状況までも一瞬にして把握できるからである。

トイレの歴史は、意外や意外。地球上に「文明」が誕生したときに遡る。

毎年のように古代遺跡を渡り歩いている私は、そこに

ひとつの共通点を見出した。

ほかでもない。「トイレ」と「上下水道設備」の存在である。

紀元前 2500 年頃に、インダス河流域で誕生した古代都市「モヘンジョダロ」は、「ハラッパ」とともにインダス文明を代表する文明都市で、今日のパキスタンに位置している。

現在のモヘンジョダロは、夏には摂氏 40 度を越す猛暑にくわえ、肌を突き刺すほどに照りつける太陽光線で、吹き出す汗もアツという間に蒸発してしまうからたまらない。

この地で人間が暮らしていたなどとは到底想像できない。

しかし、フラフラの足どりで遺跡を観察すると、都市設計があまりに精巧であるのに驚かされてしまう。

そればかりではない。

トイレはなんと「水洗式」であった形跡が見てとれるし、地下深くに掘られた溝には、上水道と下水道がきちんと区分けされて設置されているではないか。

おまけに、汚物や臭いを隠そうとしたのか、溝の上端に敷きつめた赤い素焼きレンガが、地面にズラリと並んでいる。

ついこの前まで、日本の道端で見かけた光景が目前に出現したとき、納得させられた。

上下水道を完備できた都市だけが、今日までその姿を遺すことができた。つまり、衛生観念に長けた民族だけが、苛酷な世界を生き残れたという史実を物語るのではないか。

日本でも「藤原京でトイレ発見」されたという報告があったのも同じ時期だった。

45 【サーフィンの歴史と魅力】(ハワイ)

マリンスポーツの代表格のひとつ「サーフィン」。夏の海はもちろん、冬だってボード片手に海岸に集まるサーファーたち。

日本におけるサーフィンは早くも 1920 年代に板の上に腹ばいで乗る「板子乗り」の形で行われていた。

しかし、今日の大流行を迎えるきっかけとなったのは、1960 年代初頭に在日アメリカ人が湘南や千葉外房の海岸で行った板の上に立つスタイルを日本人が真似を始めてからだといわれている。

その後、1965 年には日本サーフィン連盟が発足し、翌年には参加者 100 名弱の第 1 回全日本サーフィン大会が開催され、競技種目となった。開催場所は千葉県鴨川海岸。

サーフィンの起源はその年代を確定する事は難しいけれど、発祥の地はオセアニア、わけてもポリネシアのハワイを中心に発達したことはよく知られている。それ

は、大きな板に腹ばいとなって、水上を移動する手段として利用されたのが最初であった。しかし、サーファーにとってはたまらなく魅力的な大小様々の波が打ち寄せてくるハワイ。島民が板を使って遊び始めるのに時間はいらない。板の上にしゃがんだり、立ったりするスタイルがほどなく登場する。

ハワイでのサーフィンの大流行は半端ではなかった。その証拠に 19 世紀に布教活動で来島した宣教師が、祈りの妨げになるからと、島民全員にサーフィン禁止令を出すほどだったというから、当時のビーチはサーファーでさぞ賑わったことだろう。

夜明け近くなると、サーファーたちが波を求めて海に向かい始める。

46 【泳ぐ女たち】(ブラジル)

5 人の女性が画面いっぱいに描かれている。全員裸で、カンバスの左右上方の二人は明らかにクロールをしている。残りの三人は正面を向きふくよかな裸体を惜しげもなく見せつけている。

ブラジルの画家ヴィンセント・デ・ヘゴ・モンテイロ作「泳ぐ女たち」だ。

若くしてパリに渡り、20 世紀初頭にフランスで起こった前衛美術画派で、物体を幾何学的図形で表すことにより立体感を出そうとする、いわゆるキュビズム絵画の影響を強く受けた後、ブラジルに帰国したモンテイロ。

1920 年代から 30 年代にかけてスポーツを題材としたモチーフを精力的に手がけ印象的な作品を多数残している。この「泳ぐ女たち」もそのひとつ。

ひとりひとりの肉体は、なんだか木彫りの人形がそのまま描かれているようでもあり、またモンテイロ独自の造形感覚から飛び出してきた創作的な女性像のようにも見えて、いつまで眺めていても飽きることはない。

この不思議な感覚をわき起こさせるのは、ブラジルという独特の地域性をもつ風土にあるのではと考えたとき、「スイマーの肉体」とは何かという命題に到達するように思えた。

鍛えぬかれた近代スイマーの肉体は、すぐさま脳裏に浮かぶはず。しかし、それは勝利至上主義などイデオロギーからの産物ともとれる。モンテイロの「泳ぐ女たち」は、ブラジルといういわば、混血的風土がかもし出す肉体像ではないか。スイマーならぜひ一度見ておきたい作品だ。

47 【パリの水浴禁止令】(フランス)

16 世紀中旬、ヨーロッパ一帯にペストが大流行した。別名「黒死病」とも呼ばれる法定伝染病だ。病死する患者の悲惨な死を目の当たりにした人々は、恐怖におのの

きながらも何とか伝染を予防しようとやっきになったのは言うまでもない。

そして、その結果出された予防法が「水」に関わる活動をすべて禁止するという今では考えられない条例であったというのだから驚く。

フランスはパリ。意外な観念からこの禁止令は出されたことが明らかとなる。その考えとは「水は皮膚に浸透してくる」というものだった。

つまり、人間の毛穴から有害な菌を含んだ水が体内に侵入してきて、体を蝕んでいくと信じていたのである。

人がひとたび信念を持つと、それがたとえ迷信であったとしても、なかなか払拭できないのと同様「水が皮膚に浸透する」といった観念は、社会状況とあいまって急速に人々の思想を支配してしまった。

そうなると誰も止められない。「水」だけでなく「湯」も同様の扱いを受けてしまう。パリの医師は堂々と「裸の体が接し合う施設」をことごとく批判し、民衆に使用の危険性を説いて回ったのである。そのため、公衆浴場はもちろん、それまで老若男女を問わず楽しんでいた水浴や水泳までもが、敬遠されてしまったのは歴史が語るところである。

世界史上で水泳がこの世から姿を消してしまったのは、後にも先にもこの時期だけである。ちなみに、パリで水泳の復活を見るのは約 200 年後、パリ初のプールが創設されるのを待たなければならなかった。

48 [4000m 自由形！！ 消えていった五輪種目] (フランス)

4000m 自由形なんていう競技を聞いたことがあるだろうか？日ごろの練習じゃあるまいし、「そんなの知らない」と答える人がほとんどのはず。

しかし、実際にあった競技である。

1900 年フランスのパリで第 2 回オリンピックが開催された。このオリンピックは万国博覧会付属の国際競技大会として行われたもので、その期間は 5 月 20 日から 10 月 28 日と 5 ヶ月以上に渡って実施されている。

8 月 11,12,15,19 日の 4 日間で行われた水上競技に登場したのが冒頭の 4000m 自由形である。優勝したのはイギリスのジョン・ジャービス。記録は 58 分 24 秒。観客はランチでも食べながら観戦していたのだろうか。それほど時間のかかった競技であったのは間違いない。

当然といえばその通りだが、この競技は 1 回限りで姿を消している。第 2 回大会は、先にも述べたが万国博覧会に組み込まれたものだけに、見世物的要素が強かったのだろう。4000m 自由形の他にも、200m 障害や 60m 潜泳、さらには 200m 団体（おそらく何人かが同時に泳ぎ、順位合計の少なさを競った競技であろう）などが行われている。もちろん、いずれの種目もこの大会かぎり

で後には継続されていない。

ちなみに、途中で姿を消した種目としては、1896 年第 1 回アテネ大会の 100m 自由形（水兵のみ）や 1904 年第 3 回セントルイス大会、1912 年第 5 回ストックホルム大会、1920 年第 7 回アントワープ大会の 3 大会のみ実施された 400m 平泳ぎなどだ。

時代の流れを感じさせてくれるオリンピックのひとつコマである。

49 [死海で泳いだ！！] (ヨルダン)

異常な濃度の塩分と鉱分のためどんな生物でも棲息できない死の世界。人よんで「死海」という。ヨルダンの首都アンマンからおよそ 1 時間。海拔マイナス 400m という、地球上で最も低い場所に位置するここ「死海」。

太陽光線があたると黄金色にキラキラ光る水面に、体を横たえゆっくりと頭を持ち上げてみる。けれども、体が沈んでいくといった気配がまるっきり感じられない。

それもそのはず、死海の塩分濃度は通常の海水の 4 倍もあるからなのだ。だから、プカリと浮いたまま新聞を読むことだって簡単にできてしまう。

元競泳選手の^さ性とはなんと悲しいのだろう。頭の後ろに手を組んでユラリユラリと漂いながら、この無重力状態で泳げば世界記録保持者並みのスピードが出せるに違いないと思いついたのである。

ゴーグルをしっかりと目に当て、勢い込んで泳ぎ始めたその直後、その考えがあまりにも愚かであったことを思い知らされた。

極度に濃い塩分を含んだ海水は、想像をはるかにしのぐ塩辛さで、口にちょっと入れてただけでも飛び上がるほどだし、ゴーグルの隙間から流れ込むはずのない海水が目にはいるやいなや失明するのではないかと思うくらいの激痛が走り、のたうち回ってしまう。

苦痛に顔をゆがめながら、必死で岸へと泳ぐのだけれど、なかなか前に進んでくれない。なぜなら、バタ足をいくら打っても体が見事に浮いているせいで、足が信じられないほど空中高く持ち上がり、水面をバタバタ叩くだけで推進力の役目をなしていないためである。

プールの水を死海の水に入れ替えたなら、驚異的な世界新記録が出せるはずと私は考えた。

そんな思考がいかに浅はかであるかを身をもって体験させられた瞬間だった。

50 [極寒の地の“汗かき風呂”] (ロシア)

極寒の地ロシア。その寒さのため田舎では今も昔と変わらない極上に熱い蒸気風呂を備えた風呂小屋を見ることができる。そして入浴方法もずっと同じだという。

18 世紀、ロシアを旅してこの独特の風呂小屋を発見し、果敢にも入浴に挑戦したフランスの天文学者アベ・シャッペ・ドトゥロシュの体験談はこうだ。

「風呂小屋の戸を開けて入ろうとしたけれど、たちまち煙にまかれて急いで戸を閉めた。というのも風呂場で火事が起こったと思ったからだ。風呂場の蒸気は想像以上にすさまじく、再度入ったものの、すぐに出ようと決心したものだ。しかし、私のために昨夜一晩かけて風呂を暖めてくれたことを考えるとそうもいかず、ひたすら耐えた。熱気が頭にのぼり、熱い石の上にでも座っているようだった。あまりの熱さでベンチから崩れ落ち、気を失いかけてしまった。汗の吹き出した体のまま外へ出ようとしたが、あまりにも外は寒く、しかたがないので、ナイトガウンをはおったまま、そりで宿まで送ってもらう始末。私は、この最初の冒険で、ロシアの風呂が嫌いになり、それから何度も勧められたが、結局二度と入ることはなかった。」

おそらく彼はロシアの風呂を誤解していたのだろう。それは、我々の考える風呂とは根本的な違い、つまり風呂が「体を洗うのではなく、ロシアでは汗をかくものだ」ということだ。彼の驚きは当然かもしれない。

ともあれ、外は零下の極寒の地。

熱した体がアッという間に凍りつく。自然の脅威を実感する瞬間でもある。